



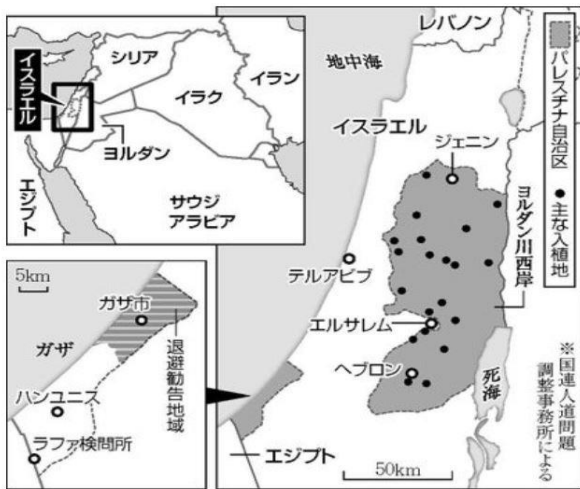
イスラエル・パレスチナ問題を考える

玉上 佳彦

連日のマスコミ報道を見ていると、安穏な日々を送っている日本人には何もできないもどかしさを感じて、悶々としてしまうのは、私だけではないでしょう。遠いアラブの地で1万5千人以上の人々が亡くなっているのは見るに耐えないことであり、平和な世界を希求することのできない絶望的な闇の中にはいるではないでしょうか。

●宗教に絡む軋轢

エルサレムには、ユダヤ教の聖地「嘆きの壁」、キリスト教の聖地「聖墳墓（せいふんぼ）教会」、イスラム教の聖地「岩のドーム」がある。3つの宗教の聖地は、城壁に囲まれた0.9平方キロメートルの旧市街区の中に共存しているというのは極めて異常な地域であり、旧市街区と城壁群は1981年に世界文化遺産に登録され、世界中の人々が聖地巡礼に訪れている。これらの宗教にあまり縁のない私達からは理解できないことであり、歴史的な背景には2,000年前に遡る宗教的な軋轢があるとされている。



【出展: 読売新聞 2023年10月28日】

●領土問題

この紛争は、イスラエルとパレスチナ人の間での国家建設と領土問題に関連しているようで、同じ地域に暮らしており、古代からのいろいろな宗教の軋轢が存在していた。

紛争はユダヤ人入植者の増加とパレスチナ地域のアラブ人を排除するシオニスト運動の登場とともに始まり、第一次大戦後、イギリス統治下のパレスチナで、ユダヤ人入植地の建設が始められた。

第二次大戦後、国連はパレスチナの分割を提案し、イスラエル国家の建設が実現し、パレスチナ人多くは自分たちの土地を失い、困難な状況に直面したのである。

以来、イスラエルとパレスチナ間の領土争い、人権侵害、テロ攻撃などの紛争が続いており、相互不信や敵意が根強く続いていたのであろう。



【パレスチナ国旗】

●大規模攻撃の悲惨

今回の衝突は、イスラエルのフェスティバルの最中にハマスが攻撃し、多くの人質を獲ったのが、きっかけで、過去のイスラエルへの不満の爆発が表面化したのだが、これに対し、イスラエルが圧倒的な軍力でガザを攻撃し、多くの市民を殺戮するという残忍な事態に到った。報道によると死者は15,000人以上、うち子供は5,500人以上という。

現実にはマスコミで報道されているとおり、イスラエル軍はハマスを全滅するまで、一斉攻撃をかけてガザを攻撃し、多くの民間人（特に子供）を殺戮している非人道的行為は、国際法上の違反でしかないのだが、誰も止めることのできないたたまれないことである。

●和平の道はないのか

客観的にみて、現状では、人質の解放を目指す一時的な休戦は可能かも知れないが、継続的な休戦は難しいだろう。即時停戦を求めるべきだが、アメリカがイスラエルを支援している限り、主要国や国際機関の積極的な関与が、和平プロセスの推進に寄与できないであろう。

国際社会の一致や協力が必要だが、残念ながら、ウクライナ戦争にみられるようなロシア・中国・イランなどとアメリカとその同士国との世界の分断化が進みつつある中では、国際協調は不可能だろう。

日本はイスラエルやアラブ諸国とは比較的友好的な関係を維持してきているので、積極的な仲介は可能はずだが、何らの手を打てない現状は情けない限りである。残念ながら、日本政府はアメリカに追随せざるを得なくなっているので、期待することは無理であろう。

草の根レベルでガザで頑張っている日本人医師や看護師のボランティアに敬意を表せざるを得ない。